

石龍子と相学提要

——筑後久留米藩で最初に解剖をした医師 酒井義篤が病相を担当執筆——

中山 茂春

緑風会水戸病院

石龍子(第5代, 明治後期から大正時代)は日本における性相学(人の容貌骨格を見て性格運命などを判断する学問)の始祖で泰斗, 又観相学者である。明治42年頃から大正末期までの12年間は全国に石龍子ブームができる程日本の名声を得た。石家は江戸時代, 正徳4年(1714年)に初代石龍子が江戸芝三島町(明治時代の町名で芝区三島町11番地, 現在の東京都港区芝大門1丁目)に居を構え, 江戸で医業の傍ら観相学を始めている。石家第3代石龍子(相栄)の時代に観相学が医学の範疇なのか陰陽学の範疇なのかの裁判が行われている。安永8年(1779)9月12日に始まり安永9年(1800)3月23日に判決があり, その記録が残っている。この時代は陰陽学の名の下に京都の土御門家がこれを監督し, 人の運命の吉凶禍福を占う術に従事しようとする者は土御門家の免許を受けなければ営業を許されぬ事になっていた。しかし石龍子は, その許可を得ずに江戸で医業の傍ら観相学を始めたので訴えられたのである。裁判は時の老中列座の上行われた, 判決は町医者石龍子お構いなし, 訴えた吉村権頭(土御門家の関東総奉行)は押籠30日, 役儀取り離し, 流浪とある。観相学は医学の範疇と認められたのである。その後, 石家は代々石龍子を名乗り観相学の家として昭和時代まで続いた。第5代石龍子(明治後期から大正時代)には実子は無く, 第6代の石龍子(昭和時代)は他家からの養子である。ここに江戸時代中期から観相学で有名であった石家の本来の血統は絶えた。実は第5代石龍子も養子であるが, これは血縁の家からの養子である。筑後久留米藩医中山家の分家に当たる儒学者中山泰橋の次男(中山時三郎)が石家の養子になっている。石家と中山家は旧来からの縁続きの間柄で, お互いの家が絶えようとする時はお互いに養子をやって家を存続させると言う約束があったと伝えられている。

中山時三郎は文久2年(1862)9月10日生まれ, 筑後久留米の田舎から東京に出て慶応義塾に明治14年9月20日に入塾している。これは中山家の姻戚に当たる久留米藩医松下元芳(大阪の適塾で福沢諭吉の1代前の塾頭をした医師, 福沢の親友で福翁自伝にも出てくる)の影響が大きいと考えられる。慶応義塾を卒業して帰郷後は明善中学校(旧制中学, 元の久留米藩の藩校)の英語の教師をしている。明治25年6月13日に石龍子の次女貞の婿養子となっている。久留米の歴史書の多くに, 儒学者中山泰橋に関しては, 家は代々紫琳台と称して漢学と観相学で有名であったと記載があるが, 本来は中山泰橋の母の里に当たる岩邑家(岩村家)の事である。岩邑家が絶えたので中山家が継いだのである。家には代々伝わる「相学提要」があり, 中山時三郎もこれを学んでいる。「相学提要」は中山泰橋の母方の祖父に当たる岩邑石庭が文化10年(1813)に編纂している。その中の病相を久留米藩で最初に人体解剖をした医師酒井義篤が担当しており, 本の完成に当たっては東都(江戸)の石孝安が撰す, と記載がある。医師の酒井義篤は「相学提要」に携わって9年後の文政5年(1822)に筑後久留米藩で初めての解剖を行っている。酒井は黒岩十右衛門を助手に門弟, 同士ら数十人の前で解剖を行い「解体図志」を作成している。杉田玄白, 前野良沢らが江戸小塚原で腑分けに立ち会った明和8年(1771)から51年後, 解体新書が完成した安永3年(1774)から48年後であった。酒井が久留米藩で初めて解剖を行った背景には「相学提要」の病相に携わった事が大きく影響していると思われる。